

「桜さく遠山どりの」一首をめぐって

片山 享

一

『新古今集』春下巻頭歌、

釈阿、和歌所にて九十賀し侍りしをり、屏風に、山に桜さ

きたるところを

太上天皇

桜さく遠山どりのしだりをのながし日もあかぬ色かな

は、建仁三年（一一〇三）十一月二十三日、和歌所で催された

俊成九十賀御会のための四季屏風四帖十二首の「春帖」の料の

花歌である。詞書に「屏風に、山に桜さきたるところを」とあ

るが実際に春帖屏風に選ばれた花歌は、有家の、

けふまでは木ず糸ながらの山ざくらあすは雪とぞ花のふる
さと

であって、御会後まもなく、一時あたかも新古今撰者らが、同年四月に撰歌を進覧し、部類の始まる翌元久元年七月以前の、所謂御点時代であり、院自らこの歌を新古今集に入集し、撰者らは春下巻頭歌に据えたのである。

この歌について、古来、諸抄にはおおよそ二様の受け止め方がある。一つは『新古今和歌集聞書』（常緑抄）以下にみえる、詞書によつて俊成九十賀の祝歌であることを強調するもの。例えば『新古今拔書抄』にみられるごとく、

哥のおもては、桜に遊覧して永日をもみじかくおもふ御心也。下の御心は、彼卿九十賀に成侍れど、名匠たるにより

いつまでも在世の御望のよし也。就中、人丸を本哥になさるゝは、この道に長じたる事を思召寄られたる也。芳凡（マツ）感及べきにもあらぬ御製と也。

に代表される、表面は花の歌だが、下に人丸の歌を本歌に取ることによつて、俊成を人丸に比して慶賀する意を籠めたとする見解であり、さらに「新古今抄出聞書」は人丸の本歌の詞を取ると共に、「うちの巻に、匂ふ兵部卿うき舟の君にあひてのどけき春の日にみれどもくあかぬ心ちすといへる心をとれり。」と「源氏物語」浮舟の巻の心を取つた歌とする。

今一つは、純粹の花の歌とみるもので、『宗祇自讃歌注』は、花に執心深き歌と捉え、

人丸の哥に、足引の山鳥の尾のしだり尾のながくし夜をひとりかもねむと云をとりてあそばせり。さるによりてたけもたかく、すがたもおもしろきにや。しだりおのながくしといへるところに執心ふかきさま見えたり。哥はたゞ毎首作者のおもひ入れたる所をよくく心をつけて見侍るべき事にこそ。

と述べ、「九代集抄」は、さらに、

これは俊成卿九十賀にあそばされし哥也。それはさもあれ、たゞ風景なる哥を見たるがよき也。さくらを思ふにながき

日もなきとなり。

と賀歌とみることを拒否し、純粹の花の歌と見るべき視点を主張している。「尾張の家づと」も

俊成卿の命ながきをおほしめしたりといふ説は俗人の常おもひよる事なれど、細かなるに過て此ころの氣象にかけあはず、たゞ花の御歌なり。少しも歌にゆるあらせんと構るは俗流の注釈なり。とかくいひまけなどするうちに英雄の氣うする也。百人一首のうらの説といふやうの事さへ出くるなり。

と新注の裏説否定の立場から「たゞ花の御歌」と見るべきことを主張するのである。

近代の諸注釈は、例えば小島吉雄氏が「俊成の長寿を賀する意を象徴させている。」註と述べるごとく、程度の差はあるが、概ね賀の心を籠めたと見る。丸谷才一氏は「慶事に当つて詠む挨拶の歌の傑作」と評価し、「新古今抜書抄」の人丸仮託説を積極的に支持し、さらに「源氏物語」浮舟の巻の匂宮の台詞の典拠である「古今集」(恋四、紀友則)の

春がすみたなびく山のさくら花みれどもあかぬきみにもあ
るかな

を本歌と認め、二首の本歌取として「この長寿をことほぐ賀歌

にはまた、恋歌という裏側があるわけで、事実、詞書を除いて読んでみれば本歌のせいもあつてかなりエロチックな気配が漂つて来る。」と鑑賞している。

こうして近代注釈でも積極的に賀歌と捉えるものから消極的に賀の心を籠めたとみる見方があり、また尾上八郎「評釈新古今和歌集」は、「見飽かぬ花の風情を、長長と残りなく述べさせられた御技術はまことに抜群である。当代のすぐれた歌匠たちも三舎を避けたであろう。まことに豊潤・佳麗・高雅である。」と純粹な花の歌とみるのであり、古注諸抄の諸説の世界から抜け出してはいないのである。

二

俊成九十賀については「家長日記」「俊成卿九十賀記」(「殿記」別記)「明月記」「建礼門院右京大夫集」などによって知られる。屏風歌詠進・撰定については「明月記」に詳細で、建仁三年八月六日条に「夜深清範奉書云、入道皇太后大夫於和歌所可賜九十賀、屏風歌可詠進者、此事入道殿深令謙退給。」とあつて九十賀に先立って八月六日屏風歌詠進の命が下され、俊成は固辞しているが、八月十四日条に、

九十賀屏風歌今日可詠進由、夜中重被仰、放生会當之間、風情弥泥。自殿下有召、午終參入。給御歌見之。愚詠又御覽。今度作者親定、殿下、大僧正、有家朝臣、定家、雅経、讃岐、丹後、宮内卿、俊成女。明日可撰定とあつて、十四日夜定家は詠進した模様で、翌十五日に撰定が行われたと見られる。右の作者名には見えないが、「家長日記」の屏風歌夏帖・郭公に「前大納言忠」とあり、石田吉貞氏は前大納言忠経を擬されているが、後藤重郎氏が、「建仁三年前大納言であつたのは忠良であるし、「家長日記」抜書本である「俊成卿九十賀記」では「前大納言忠良」と記しているものもある。」と指摘されることく前大納言忠良を作者に追加すべきである。「家長日記」によると、「此題みなよみてまいらせあはれたりしを、人々めしあつめて、一首づゝえりいだされて、絵所のかしこきかざりめして、此歌の心をいひきかせかゝせらる。このしきしがたは撰政か、せ給。」とあり、良経「俊成卿九十賀記」にも

屏風四帖被新調。延暦例四帖被調四季各一帖也。上皇以下当世歌仙等詠和歌。撰定之後、仰給師被圖之。予依仰今日書件色紙形。可被仰他人之由、雖申請之、永可被留置御所。猶可書之由有仰。仍書之。

とあつて、院自ら歌人十一人十二首の歌から屏風歌各一首を撰定され、御製二首、各歌人一首を選んで四季四帖の屏風歌を決め、色紙形を良経に書かせ、絵所の絵師に命じてそれぞれの歌の心を言いきかせて屏風絵を描かせられた。屏風歌は本来屏風絵の賛であるから先に屏風絵が描かれ、その図柄によつて和歌を詠むのが通例で、兼実家文治六年女御入内月次屏風も同様であつたが、この度は歌題のもとに和歌が詠まれ、その和歌によつて屏風絵が描かれるという異例な作成過程を辿つており、屏風歌を中心とした四季屏風であつたといえよう。

院が屏風歌に撰定した自歌は春帖「若草」秋帖「月」の二首である。「新古今集」に入集した「花」歌を撰定しなかつた理由について樋口芳麻呂氏は「春帖の三首は、「霞」の歌を撰政良経が、「若草」の歌を院が、「花」の歌を有家が詠んでいる。院は自分が十一人の歌人の屏風歌を撰出した撰者の立場であることもあり、また撰政の地位に敬意を表してか、第一首目の「霞」の歌は良経の作を選び、自分の歌は第二首目に位置づけている。このように配列が考慮されたとする、自分の「花」の歌がいくら自撰作と思われたとしても、第一帖（春帖）末尾に自分の歌をおき、有家の「若草」の歌を選んで、第二首にならべることができない。第一帖第二首は院としては自歌をおく

べき好位置だったのである。俊成九十賀屏風歌においては配列への考慮もあつて、院は「若草」の自歌を撰んだ。しかし、「新古今和歌集」には自分としても自信があり、定家らも撰入を希望する「花」の歌を収めることとし、定家らは春下の冒頭にこの歌をすえたのである。」と推定されている。もつとも、後藤重郎氏は、「春帖」霞・若草・花の順序は、「後鳥羽院御集」「秋篠月清集」（「拾遺愚草」も）では「家長日記」と同じであるが、別本「俊成九十賀記」、「明日香井集」、賀茂本・冷泉本の頭注記載の定家自筆「俊成九十賀記」では若草・霞の順序を指摘されている。つまり、春帖の初めが授賀者後鳥羽院、冬帖末尾「雪」が受賀者俊成に替つて詠んだ定家詠となつて首尾呼応するというのである。ただし、冬帖、千鳥・氷・雪三首は別本「俊成九十賀記」「後鳥羽院御集」では千鳥・雪・氷の順となつており、必ずしも首尾相応しているわけではなく、むしろ四季の順序から言えば「後鳥羽院御集」の歌題順が順当なのであつて、父俊成に替つて謝意を詠じた定家の雪の歌を屏風歌撰定の際に最後にもつてきた可能性も考えられるわけで、春帖の歌題については樋口説が有効であるように思われる。

ところで、「九十賀四季屏風」は勿論賀屏風であるから四季

の移り変りを繊細に構成すると共に慶賀の意を備えたものではなくてはならない。屏風歌を賀の意識からみると、例えば有家の「花」歌について久保田淳氏が指摘されるように、「凋落を予見する句」もあるわけで全く賀の意を有さぬ四季歌もあるが、賀歌としては「夏帖」「五月雨」の雅経の歌

かめのをのたきのしら玉千代のかずいはねにあまる五月雨
のそら

があり、これは「古今集」巻七・賀・紀のこれをかの「亀の尾の山のいはねをとめておつるたきの白玉千世のかずかも」を本歌として、五月雨に寄せて亀の尾山の滝の白玉に俊成の長寿を寿ぐ賀の意を詠んだ歌である。そして「冬帖」「雪」は定家の歌で、

はなの山あとをたづぬる雪のいろにとしふるみちの光をぞ
見る

この歌は、父俊成に替って花山僧正の跡を尋ねて長年歌道に携わり、寿賀を賜ったことへの謝意を述べた歌でしめくくられている。

各歌人の詠進した屏風歌十二首の賀歌はどのようであったのか。現存詠進十二首を備えているのは良経・雅経・後鳥羽院の三人に過ぎないが、良経歌では雅経の「五月雨」の歌ほど正面

から寿算を詠んだ歌は見当たらないが、

「春帖」花

おいらくのけふこのみちはのこきなむちりかひくもる花の

しら雪

「冬帖」雪

ふりにけるともとやこれをながむらむ雪つもりにしこしの

白山

があり、「花」歌は落花の白雪に寄せて俊成の長寿を祝い、

「雪」歌は雪に蔽われた越の白山に寄せて九十賀を迎えた俊成

の気持を付度して祝意を籠める。雅経は「五月雨」の外に「冬

帖」「千鳥」で

ともちどり君がやちよのこゑはしてなみはのどけしわかか

うらかぜ

と詠み、永遠に変らぬ俊成の長寿を寿ぎ、俊成を中心とする歌

壇の隆昌を讃え、「屏風歌」十二首に賀歌をちりばめている。

次に、後鳥羽院の「屏風歌」十二首をみる。

霞

霞しく春の夕ぐれながむれば山さしのぼるおぼろなる月

若草

下もゆるかすがののべの草のうへにつれなしとても雪のむ

らぎえ

花

桜さくとほ山鳥のしだりをのながながし日もあかぬ色かな

郭公

ほのかにもいまや聞くらむ時鳥いやとほさがるすゑのさと

人

五月雨

水まさるみづのわたりの五月雨につなで程ふるのぼり船か

な

納涼

し水せくかた山ぎしのご松かげここをしめてやいほりむす

ばん

秋野

旅ねする野原秋かせ身にしめて面影さらぬ故郷の月

月

秋の霜しろきをみればかささぎのわたせる橋に月のさえけ

る

紅葉

山のせみなきて秋こそふけにけれ木木のこずゑの色まさり

行く

千鳥

旅ねするあまのとま屋のとまをあらみ寒き嵐に千鳥さへな

く

雪

山ふかきしのやの雪のあさければ都は猶やみぞれなるらん

水

大井川こほりをしのぐいかだしの跡よりこそは舟のかよひ

ち

十二首を通説すると、雅経・良経にみられた賀歌は一首もない

ことが注目される。すなわち、「春帖」「簡」は春夕の山月遠望。

「若草」は

春日野の下萌えわたる草の上につれなく見ゆる春の淡雪

(堀川院百首・残雪・国僧)

を本歌とした春日野の若草の歌。「夏帖」では「郭公」は過ぎ

ゆく郭公の一声から遠里人を思いやつた歌。「五月雨」は美豆

のみ牧の叙景。「納涼」は片山岸の涼気を詠み、「秋帖」「秋野」

は旅の野原の旅情。「月」は

かささぎのわたせる橋に置く霜の白きをみれば夜ぞふけに

ける(新古今・冬・中納言宗持)

を本歌とした宮中秋月の歌。「紅葉」は秋山の紅葉の景。「冬

帖」「千鳥」は旅中の千鳥の歌。「雪」は深山の雪から都を偲び、「氷」は大井川碎氷の叙景である。こうして院の「屏風歌」詠草をみると、四季題による叙景や旅情が主であつて、賀の意識は全くといつていい程にない。

ここで留保した「花」の歌について検討しておきたい。この歌は、まず「桜さく遠山」と山桜の咲いた遠山の景を提示する。遠山の桜は前掲の「春がすみたなびく山のさくら花」や「山ざくら霞のまよりほのかにも」（古今集）と詠まれるごとく、霞につつまれたほのかな美しさをた、えた遠景であるが、「遠山」から「山鳥」に続けて、人丸の

足びきの山鳥の尾のしだりをのながし夜をひとりかも
ねん（拾遺集・恋三）

の「山鳥の尾のしだりをのながし」の序詞を取り、本歌の「夜」を「日」に変えて、春日の長閑な気分を表現し、結句に「あかぬ色かな」と初句に示した遠山の桜のほのかな美しさに耽溺する強い抒情となつてゐる。

「遠山」と「山鳥」の続け柄は、

雪のゐるとほ山どりのよそにてもありとしきけばわびつつ
ぞぬる（新古今・恋五・説人しらず）

雪がより遠山鳥のなきてゆく声ほのかなる恋もするかな

（新古今・恋五・躬恒）

などがあつて、新古今撰者の進覧した歌に親炙していた院は、この詞統きを早速に取り用いたものであろう。本歌の恋情に耐えかねる情緒縮綿たる夜の長さをイメージ豊かに表現した序詞を取つて、長閑やかな春日の長さを転じることによつて悠然たる風韻を示したのは流石で、「あかぬ色かな」と結んだ句の強さとあいまつて、悠久性を感じさせ、一首は華麗で長高い、遠山桜の美景に酔う抒情となつてゐる。

ところで、この歌の発想に影響したかと思われる歌が「拾遺集」にある。

賀御屏風に

藤原千景

咲きそめていく世へぬらんさくら花色をば人にあかず見せ
つつ（拾遺集・春上・四四）

で、「八代集抄」が「賀の歌なれば、いく世へぬらんなどよみて其人をいはへる心也」というごとく、桜の美の悠久性を讃えて賀算を祝つた屏風歌である。院の歌の「あかぬ色かな」はこの歌の下句「さくら花色をば人にあかず見せつつ」の影響下にあるのではなからうか。そうすると、院の歌も桜に擬して長寿を祝う発想を基本的に有したことになる。ただ根本的に異なるのは、「拾遺集」歌が桜を擬人化し、桜に擬えて賀算する比喻

歌であるのに対して、院の歌は賀算の心は内に籠めて、純粋な風景としての遠山の桜の色の美しさを詠嘆するのであって、具象化された姿はあくまで花の歌なのである。その意味で「俊成の長寿を賀する意を象徴させている。」と云えるであろう。たゞし、この場合、賀算の意を觀念象徴として表象した歌ではなく、賀算はむしろ余情として籠められたものであったとみるべきであろう。「新古今抜書抄」のいう人丸仮托説は論外であるが、下の心として賀算の意を認めた古注の解釈は、この意味で正しいとすべきであろう。

三

この歌は、後鳥羽院によって「新古今集」に入集された。その詞書は「釈阿、和歌所にて九十賀し侍りしをり、屏風に、山に桜さきたるところを」とある。前述したごとく、「俊成九十賀屏風歌」は、最初に歌題が与えられ、詠進の後撰定され、その撰定歌によって屏風絵が描かれた経緯をもつ。従って「花」題撰定歌、有家の、

けふまでは木ずゑながらの山ざくらあすは雪とぞ花のふる
さと

によって絵師が描いた屏風絵は、長等山の桜の満開の図柄であったと思われる。「屏風に、山に桜さきたるところを」という「新古今集」詞書は、有家の歌の図柄を流用したものであったわけである。もともと院の歌は遠山の桜の景であるから、現実の屏風絵の図柄とさして矛盾するものではなかったと思われる。しかし、重要なことは、詞書の図柄の説明により、この院歌は屏風撰定歌の扱いを受けていることになり、事実と反していることである。これは撰者達のなし得るところではなく、詞書の書き方まで院の細かな指示によってなされたと思われる。とすれば院は、「釈阿、和歌所にて九十賀し侍りしをり」に俊成賀算の意を籠めたものと考えられる。もつとも、この「屏風歌和歌」から今一首「新古今集」に入集した

釈阿に九十賀たまひ侍りし時、屏風に、五月雨

摂政太政大臣

小山田にたくしめなはのうちはへて朽ちやしぬらんさみだ
れのころ（新古今・夏・二二六）

も詞書の書式は同様であるが、ただこの詞書には図柄の説明はなく、単に「五月雨」とあるだけだから、恐らく院歌詞書に做つて書かれたものと思われる。なお、この歌について「尾張の家づと」が「打はへてくちやしぬらんは賀の歌には禁忌なれど

古人は拘らざりし也。」と述べ、石田吉貞氏も「しめ繩の如く
齡も引き延ばされて、自然に朽ちるまでされることなどなかる
うの意を含ませであるか。」と賀の意識を指摘されるのである
が、「小山田のしめ繩」は「新古今集」夏部の前歌、

早苗とる山田のかけひもりにけり引くしめなほに露ぞこぼ
る（新古今・夏・二二五・経信）

と同様、民俗行事として神事から発生したものであろうが、既
に農村山田の景物と化しており、良経歌においても特に賀の意
を込めた歌ではなく、五月雨の湿润を主題とした四季歌と思わ
れる。

さて、この院の歌は「新古今集」春下巻頭歌とされた。桜の
歌の配列は、待花から落花に至る時の経過に従って春部上下に
互って配されることは「古今集」以来の伝統であるが、この歌
の配列構成の先蹤は「千載集」であろう。「千載集」春下巻頭
歌は、

鳥羽殿におはしましけるころ、常見花といへる心をの
こどもつかうまつりけるついでに、よませ給うける

白河院御製

咲きしよりちるまでみれば木のもとに花も日かずもつもり
ぬるかな（千載集・春下・七七）

で、咲き初めから散るまで眺め続けると意外な長さに驚く花へ
の懐いを詠んだ歌で、春下巻頭歌といふ、下命者ではないが、
白河院御製といふ、撰者達は配列に当って院親撰の立場から、
春上巻頭良経歌に対応する院の歌を据えるべき絶好の位置を見
出したのである。

院の巻頭「花」の歌に続けて、

いくとせの春に心をつくしきぬあはれと思へみよしのの花
（新古今・春下・一〇〇・俊成）

はかなくてすぎにし方をかぞふれば花に物思ふ春ぞへにけ
る（新古今・春下・一〇一・式子内親王）

の二首が配されて、当代歌人の小歌群をなして、次の翫花の歌
群へ移行している。つまり、院の、胎蕩たる春の日、遠山の桜
の美しい色はいくら眺めても見飽きることがないという暢やか
で長高い歌に続いて、花への愛着の故に長年心労を重ねてきた
思いを桜に訴えた俊成の歌が配され、次に、わがはかない生を
振り返ると花のために物思いを重ねた春であつたと花への尽き
ぬ思いを詠んだ一連の小歌群を構成しているのである。

こうして「新古今集」の配列をみると、院歌一首は純
粋な「花」の歌として構成・配列したものであつて、撰者たち
はこれを「花」の歌として遇したものと云えよう。純粹な花の

歌とみる「宗祇自讃歌注」「九代集抄」や尾上八郎氏の見解は「新古今集」の配列に拠って読む立場からのものであった。一方「新古今抜書抄」や「新古今集聞書」(常縁抄)が下心を認めた解釈は、「こと書にみえたり」「集のこと葉書なり」と言うように詞書よつての詠歌事情を考慮しての解釈であつた。前述したごとき院の詠歌事情と詞書に窺められた院の意識を考えれば、院の意図に従つた読みということにならう。

定家はこの歌を高く評価し、「定家八代抄」に撰んだことは勿論、自筆本「近代秀歌」秀歌例八五首中の春歌七首、

春立つといふ許にやみよしの山もかすみてけさは見ゆらむ

やまざくらさきそめしよりひさかたのくも井に見ゆるたきのしらいと

さくらさくとほ山どりのしだりをのながくし日もあかぬ
いろかな

いざけふははるの山べにまじりなむくれなばなげのはなの
かけかは

さくらがり雨はふりきぬおなじくはぬるとも花のかけにか
くれむ

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめ

せしまに

ひさかたのひかりのどけきはるの日にしづ心なく花のちる
らむ

の「花」歌六首中第二首目に入れ、「詠歌大概」秀歌体大略一
〇三首中春歌一六首の「花」歌十一首中の第三首目に配し、い
ずれも花盛りの位置に置いていて、定家はこの歌を「花」歌の
秀歌として扱つており、賀意を象徴する歌と認めていない。

天福二年(一二三四)九月、隠岐の後鳥羽院(直接的には仁
和寺宮道助法親王)の命で撰んだ「八代集秀逸」の新古今十首
に定家は後鳥羽院の歌三首を撰んだ。

さくらさくとを山どりのしだりをのながくし日もあかぬ
色かな

袖の露もあらぬ色にぞきえかへるうつればかはるながめせ
しまに

秋の露やたとにいたくむすぶらんながきよあかずやどる
月かな

である。「別本八代集秀逸」^{は。}によると家隆もまた「新古今集」
十首中に院の「桜さく」一首を入れた。

後鳥羽院もまた、後年「隠岐本新古今和歌集」自歌十五首の
中に収め、また「時代不同歌合」に定家が撰んだ三首の自歌を

そのまま入れている。樋口芳麻呂氏によると、『時代不同歌合』^{注10}
後稿本E本（高松宮本）では、

さくらさくとを山どりのしだりおのながくし日もあかぬ
色かな

いかばかり木の葉の色のまさるらんきのふもけふも時雨す
るころ（遠島五百首冬五十首）

手もたゆみおさふる袖も色に出ぬ稀なる中の契ばかりに
（遠島御歌合、四十九番左意筈）

とあり、後稿本F本（書陵部五〇一・六〇九）には、

さくらさくとを山どりのしだりをのながくし日もあかぬ
いろかな

ひさかたのかつらのかげになくしかはひかりをかけて声ぞ
さやけき（遠島御歌合三十三番左夜鹿）

たつた山みねのしぐれの糸よはみぬけどもみだるよもの
紅葉々（遠島五百首・冬五十首）

と改訂を試みているが、新古今集歌「桜さく」の一首のみは終
始変ることがなく、院はこの歌を生涯の自讃歌と認め、その思
いは晩年になるほど強くなつたらしい。「後鳥羽院御口伝」定
家評に定家が内内の花の詠を自讃歌としなかつたことを難じて
「先達どもも必ず歌の善悪にはよらず、事がらやさしく面白く

もあるやうなる歌をば必ず自讃歌とす。」と述べたように、こ
の歌の詠歌事情と内容の優美を重んじた院の和歌観によるとい
うべく、特に隠岐潜幸後の院にとつて、この歌は専制君主とし
て廷臣に君臨した新古今時代の君臣和合の象徴として、より深
く「俊成九十賀」と結びついていたと思われる。

注1 『新古今和歌集』（日本古典全書）（朝日新聞社・昭34刊）

注2 『後鳥羽院』（日本詩人選10）（筑摩書房・昭48刊）

注3 『源家長日記全註解』（有精堂出版・昭43刊）

注4 『源家長日記校本・研究・総索引』源家長日記研究会（風間書
房・昭60刊）

注5 『後鳥羽院』（王朝の歌人10）（集英社・昭60刊）

注6 『新古今和歌集全評釈』第一卷（講談社・昭51刊）

注7 『新古今和歌集全註解』（有精堂出版社・昭35刊）

注8 この式子内親王の歌について、平成三年和歌文学会第三七
回大会（於大阪女子大学）で、久富木原玲氏が「花に物おもふ
春―式子内親王A百首考―」で「花に物おもふ」とは漠然と
した憂愁ではなく、桜の花にまつわる死者への思いが込められ
ている」という説みを示された。同氏は掲げられなかつたが、
この歌は「山家集」の「諸行無常の心を」の詞書をもつ、

はかなく、すぎにしかたを思ふにも、今もまこそは朝顔の露
(中巻・七七七)

の上句の句形に拠っており、式子内親王歌の「はかなくて過ぎにしかたをかぞふれば」は西行歌に拠りつつ、さらに具体的に無常の思いを噛みしめてきた年月を示しており、そうみて初めて「かぞふれば」の意味が明確になってくるわけで、久富木原氏の読みが示唆する所に共感できる。しかし、『新古今集』で撰者達はこの歌の個人的な嘆きの内容を読みとることはせず、花への尽きぬ思いを詠んだ歌として受けとめていたことはその配列からいえよう。

注9 森本元子編『和歌文学新論』(明治書院・昭57刊)所収
「別本『八代集秀逸』考」

注10 平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』(ひたく書房・昭58刊)